岸田達也著『ドイツ史学思想史研究』

中山治一

一

ひとりの誠実な研究者の二十年にわたる学問的精進の記録がここにある――岸田達也氏の『ドイツ史学思想史研究』は、そのような手ごたえをズシリと感じさせる作品である。「まえがき」に記されているように、本書は、著者が一九五七年から一九七六年までに発表した合計十二の論文を、取り扱う対象の前後関係にしたがって整理し補正し、最後に付論一を加えることによって成った業績である。

さいしょ、本誌編集委員からその書評の依頼をうけたとき、評者は一瞬、引き受けることをためらった。というのは、右の期間、評者は著者と近いところにいて、本書のさまざまな問題点についてしばしば話し合った関係上、その距離の無さのために書評が書評にならず、まったく私的な感想文に堕するのがおちであろうとおそれたからである。しかしその反面、そのような、いわば楽屋裏からの印象記もまた一種の書評として成り立つのではないかとも思い、けっきょく引き受けることにした。この書評がまったく個人的主観的な印象批評におわるであろうことを、あらかじめ読者にも著者にもおことわりしておきたい。

さて、著者が執筆にさいして最大の苦心を払われたのは本書のどの部分に対してであったかというと――おそらくは多くの読者が推察されるであろうところとはちがって――実は冒頭わずか十ページばかりの「まえがき」の部分であったように、評者には感じられた。それには当然の理由がある。著者はこの部分で、過去二十年を越える自己の学問生活のすべてを要約し、その時その時によって表出の仕方を異にしていた過去の学問的関心をつなぎあわせて、ひとつの「思想史」にまとめあげる必要にせまられたからである。しかも、現在の著者はもはや過去の著者ではなく、まとめあげようとする視角は、もちろん著者の現在の視角でなければならなかった。冒頭の「まえがき」には、その苦心のほどが滲み出ている。著者が最初の論文「ベーロウの『経済発展段階説批判』とその背景」(第二編第二章)を構想し発表したとき、それが二十年後にこのような「思想史」の隅石のひとつとなるであろうとは、夢にも考えられなかったはずである。

要するに、本書の特質のすべては、それが二十年間の研究の集約であって、最初から一定のプランに従って書きおろされた「思想史」ではないという事実に由来する。もし読者が「史学思想史」についての教科書的羅列的記述を本書に求めるならば、その期待は、当然、裏切られる。本書はその成り立ちからしてエドゥアルト＝フューター風の史学史叙述とは無縁であり、むしろ本書の部分部分がすべて問題の提起とその解決なのである。

二

本書が提起しかつ解決しているいくつかの問題点のうち、日本

の史学界にとってもっとも衝撃的なそれは、ベルンハイム解釈をめぐる問題であろう。第二編第一章の「ベルンハイムの史学思想史的位置」がそれを論じている。これによって著者は、明治いらいの日本の史学界を牢固として支配してきた固定観念をみごとに粉砕し、ベルンハイムをドイツ史学思想の系譜のなかで正しく位置づけることに成功した。『歴史学方法教本』（日本では『歴史とは何ぞや』）の著者として知られているベルンハイムは、明治いらいの日本の史学界では、ランケやドロイゼンと同一の思想系譜に属するもの、すなわちいわゆる正統派史学の一員として理解されてきた。ところが、実はそうではなかった――ということを、著者は理路整然と証明する。その論証の手続きは実に慎重であり、読者にはほとんど反論の余地がない。なかでも特筆すべきは、従来わが国ではただ標題が知られていただけで内容についてはまったく紹介されたことさえなかったベルンハイムの『歴史研究と歴史哲学』（一八八〇年）が、はじめて資料として駆使され、これによってかれの根本思想が疑問の余地なく明らかにされたことである。上述の『歴史学方法教本』（一八八九年）は、実はこの『歴史研究と歴史哲学』の上に構築された研究技術論にほかならなかったのであり、両者を一体としてとらえるのでなければベルンハイムを真に理解したことにはならない――ということが、著者によって今はじめて証明されたのである。

ところで、著者によれば、「相対立する二つの立場ないしは方法に対するとき、その『中間的立場』をとり、両者の『結合』をはかる」というのが、「ベルンハイムの思惟方法の特徴」であり、「ベルンハイムがこの著作において『理想主義哲学』と『実証主義』との統合を意図している」のもまた、「まさしくその現われにほかならない」という（一〇二ページ）。しかし、理想主義哲学と実証主義とは、いったい、統合可能なものであろうか。両者を統合したり、両者に架橋したりすることは、ほんらい不可能であるばかりか、そのような試みをすることさえ無意味である――というのが、評者の意見である。とすれば、なにゆえにベルンハイムは、そのようなほんらい不可能なことをあえて試みたのであろうか。何がベルンハイムをしてそのような試みをなさしめたのであるか。評者は、かれの方法至上主義がそうさせたと考える。かれの『歴史研究と歴史哲学』の結論的部分（第七章第一節）には、「歴史的方法の特質」という標題がつけられているが、ベルンハイムにおいては、理想主義哲学や実証哲学よりもむしろ方法こそ、より上位の規定的要因であった。かれの『歴史研究と歴史哲学』が本文わずか百十ページの小冊子であるのに対して、『歴史学方法教本』が八百ページに近い大著であることは、なにごとかを物語っているであろう。このような方法至上主義が出現したというところに、この時期のドイツ史学思想の――そして同時に明治二十年代の日本の史学界の――重大問題があったのではなかろうか。

三

つぎに、おそらくより古い世代の読者に深い感銘をあたえるであろうと思われる本書の論点のひとつは、ドロイゼンをめぐる問題である。もっとも、すでに第一編第一章の標題が示しているように、著者にとってはドロイゼンの「史学論」そのものが問題なのではなく、むしろドロイゼンをしてその「史学論」を構想させ

た時代的背景と、そして「史学論」の思想史的意義とを明らかにすることが問題である。この場合にもまた著者は、従来わが国の史学界には知られていなかったドロイゼン自身の古典的論文を活用することによって、ドロイゼンの思想に新しい光を投げかけることに成功している。すなわち、雑誌『ミネルヴァ』の一八五四年六月号と十一月号に連載された論文「ヨーロッパの危機の性格づけのために」である。

この論文は、クリミア戦争で露呈された英露両超大国の対決の危機を目前にしつつ書かれたものであるが、ドロイゼンにとっては、このような国際政治の破局も、実はヨーロッパ文明全体の危機のたんなる一局面にすぎなかった。ドロイゼンの時代感覚によれば、アメリカの独立およびフランス革命いご、古典的ヨーロッパは崩壊期にあった。そしてこの崩壊期にあらわれたもろもろの危機のうちで、もっとも深刻な性質のものは、「精神生活の領域」におけるそれであった。しかもドロイゼンは、コントの「実証哲学」において結晶したような、かれの同時代の実証主義の精神ないし唯物主義の風潮のなかに、その精神生活の危機を見たのである。このような精神ないし風潮の行きつくところ、そこには歴史の「物」化があるのみである。

これに対して、ドロイゼンにとっては、歴史の世界は――「物」の世界ではなく――人倫の世界であった。ところが、人倫の世界がその上に成り立つ基礎は、「意志の行為」である。それゆえドロイゼンにとっては、歴史は、「物」としてではなく、人間の「意志の行為」としてとらえられるべきものである。ドロイゼンは、歴史の「物」化に対して黙していることはできなかった。かれは、実証主義ないし唯物主義という時代の風潮に抗して、歴史の「物」化の進行を抑止しようと企てる。このようにして「史学論」の講義が開始され（一八五七年）、またバックル批判が生まれた（一八六三年）のである。

このように、著者は「史学論」講義開始の動機に焦点をあて、その部分を詳しく論ずることによって、かえって「史学論」そのものあるいはその全体の主張や論点や意義を明らかにする。すなわち、像そのものを刻み込まずに、周辺を彫り下げることによって、かえって像の全体を浮かび上がらせる陽刻の手法である。この部分（一三―三〇ページ）の叙述は、最近の著者の充実した力量をうかがわせるに十分なところである。しかし著者の意図は、「史学論」の細部に立入って分析的思考を働かせることではなく、むしろそこを発走点として史学思想のその後の運命をたどることにあった。本書第一編において、ドロイゼン論と密着しつつ、マイネッケおよびヒンツェの歴史家としての出発が論じられねばならなかったゆえんである。

四

「マイネッケもヒンツェも両者ともに、ベルリン大学におけるドロイゼンの最後の『史学論』の講義を聴講し、ドロイゼンの影響をもっとも強くうけながら、しかもそのうけとめ方が両者相異っている」。「マイネッケは、ドロイゼンからうけた影響をディルタイによって拡大深化し、他方、ヒンツェは、ドロイゼンからうけた影響をシュモラーによって補完する」（五九ページ）。著者のこの指摘は、ドロイゼン・マイネッケ・ヒンツェ三者の相関関係と、

そして同時にドイツ史学思想史上の三者の位置とを、的確かつ簡潔に表現し得て妙である。著者の規定するところによれば、マイネッケが理念史家であったのに対して、ヒンツェは一種の社会史家であった（五七ページ）。

従来わが国の史学界でかえりみられることの少なかったヒンツェについて、本書が比較的大きいスペースを割いているのは、著者が過去十数年間西ドイツのいわゆる「構造史」の研究に沈潜し、これに深い理解をもっていたことによるものであろう。すなわち、著者の現在の問題意識が、過去のヒンツェを積極的に評価させるように導いたのであろうと思われる。なぜなら、「こんにち西独史学界において『歴史学から社会科学への架橋』を意図し、社会学と歴史学との方法的結合をはかる、オットー・ブルンナー、テーオドル・シーダー、フリッツ・ヴァーグナー、ヴェルナー・コンツェらのいわゆる『構造史』派は、まさしくこのヒンツェを継承するものにほかならない」（五八ページ）からである。

つまり、本書第一編第三章のヒンツェ論は、実は第三編第二部において本格的に展開されるはずの著者の「構造史」論の伏線をなしているのである。このあたりに見られる本書の構成の仕方は実にみごとであり、これによって本書は、新旧さまざまな既発表の論文の集録でありながら、ひとつの研究として首尾結構をととのえているのである。同時にそれは、ドイツ史学思想史について著者の描く基本図式をも示している。すなわち、ドロイゼンから発出するドイツ史学思想の流れは、一方ではマイネッケ、ベーロッ、十九世紀末二十世紀初頭の政治史家たち、さらに一九一九年以後のマイネッケおよびデヒーオをつらねる本流と、他方ではヒンツェから第二次世界大戦後の「構造史」派へとつらなる傍流とのふたつになって流れつづけ、時期により状況に応じていずれか一方の流れが表層に出るという、展開の図式である。本書を構成する各部分・各テーマは、この展開図式のどこかに位置せしめられているのである。

五

「第二次世界大戦後におけるドイツ史学思想」と題されている第三編は、第一編および第二編とは構成を異にし、第一部と第二部とに分かたれている。もちろん、第三編だけで本書のおよそ半ばを占めるというページ数の関係もあったであろうし、また「構造史」に関する諸論稿にひとつのまとまりを与えたいという編集上の考慮もあったであろうが、しかし著者をしてこのように第三編をふたつに分けさせるには、やはり何か学問上の理由があったにちがいない。思うにその理由は、「マイネッケにおけるランケ批判の問題」（第三編第一部第一章）にしても、「マイネッケとデヒーオ」（同第二章）の関係の問題にしても、著者が素材として取り上げている作品がいずれも第二次世界大戦後に発表されたものでありながら、それらの内容となっている事実はすでに第二次世界大戦前、いやむしろ第一次世界大戦直後の時期に起こっていた事柄である関係上、著者もまたこの部分を「構造史」論と区別して整理せざるをえなかったからであろうと思われる。いいかえると、著者はこのような形で、戦間期、とくに一九二〇年代のドイツ正統派史学の変転を論じているのである。

そのさい、マイネッケが一度は「ランケいらいの近代史研究の

成果」の根底的動揺をみとめ、ランケ的なヨーロッパ史像の革新の必要を承認しながら、やがて「幻想の時代」の時代状況のなかで精神史の分野へそれていった（一九八―二〇二ページ）とする、著者の指摘は、戦間期のドイツ正統派史学の変貌の核心を射抜いたものとして鋭い。また、マイネッケがこの時期に放棄した課題を第二次世界大戦後に解決したのがすなわちデヒーオの『均衡か覇権か』にほかならない（一〇二ページ）とする説明は、じゅうぶん説得的であると同時に、ドイツ史学思想史におけるデヒーオの位置を確定したものとして重要である。総じてこのあたりの叙述が、最近の著者の史眼を示すものであろう。

さて、右の両章につづく第三編第一部第三章「伝統的歴史学の自己反省の動向」をプロローグとして、以下第三編第二部の全部が、「構造史」の検討にあてられている。そのさい著者は、「構造史」派の出現を、たんに西ドイツの史学思想という狭い枠内で解釈するのではなく、むしろオランダの歴史家ホイジンガの最後の講演「歴史の形態変化について」とのかかわりあいにおいて、さらにはまたフランスの「年報」派との交流関係において考察している。ともに、著者の視界の広さを物語るものであるとともに、著者の「構造史」論をユニックなものたらしめている。この部分は、今までに邦文で書かれた「構造史」論のうち、もっとも詳悉的でもっとも卓抜したものといってよいであろう。

六

最後の「付論」は、本書を成すにあたって書きおろされた唯一の部分である。ここで著者は、「構造史」派の史学思想史上の位置を確定しておこうと試みる。すなわち、全体として「構造史」派は、伝統的な正統派史学とのあいだに断絶を示すものであるか、それとも本質的には後者の枠内に包摂されるべきものであるか、という問題である。この問題を解くために著者は、こんにち西ドイツの史学界でもっとも活発に発言している若い世代の「社会科学としての歴史学」「歴史主義の彼方の歴史学」をとりあげて、これと「構造史」とを対比する。そして著者がそこから導き出した結論は、つぎのとおりであった――「マイネッケをはじめとする、『伝統的歴史学』の残照なお輝く第一の世代と、シーダーらの『構造史』派の第二の世代と、そしてヴェーラーらの『歴史主義の彼方の歴史学』の第三の世代と、この三つの世代のうち、前二者の世代間よりはむしろ後二者の世代間に、一線が画されるであろう」。すなわち、「構造史」派は伝統的な正統派史学の最後のヴァリエーションにほかならなかったのである。ドイツ正統派史学の史学思想史を対象とする本書が「構造史」論をもって筆をおいた理由は、そこにある。

読みおわって評者には、ひとつの疑問が起こった。すなわち、もう今後は正統派史学の伝統的思考は二度とよみがえらず、「社会科学としての歴史学」「歴史主義の彼方の歴史学」のみが一方的に西ドイツの史学界を支配することになるのであろうか、という疑問である。いま仮りにそのような「科学的」思考のみが支配する史学界を想像すれば、そのとき歴史把握の指間から抜け落ちる対象が余りにも多いのではなかろうか。仮りに一例をあげれば、国際政治現象のごときは、そのような「社会史」によって完璧に

とらえられることができるであろうか。その場合には、一八五四年のドロイゼンと、一九一九年のマイネッケと、そして一九四八年のデヒーオとをつらねる思考が、ふたたび対抗的かつ補完的によみがえらざるをえないのではなかろうか。マイネッケの考えていた「デュアリズムの論理」は、もはや有効に働かないのであろうか。

ともあれ本書は、過去一世紀あまりのドイツ正統派史学の史学思想の展開を体系的にみごとにとらえた作品であり、それにふさわしい深さと幅をもつ業績である。日本の史学界のために、本書の刊行を喜びたい。

（A5判　三二九頁　一九七六年六月　ミネルヴァ書房　三六〇〇円）

（愛知学院大学教授　　）